

2019  
新年

私のメッセージ

< 4 >

CPD」といいます。このACPの愛称が、人生会議なのです。私は元々外科医で、「最期は自宅で過ごしたい」と考える患者さんを支援してきました。2008年に札幌市東区で開業してからは、外来のほかに訪問診療も行い、年に10人ほどの患者さんを在宅でみています。

半数以上は病院から自宅に戻った末期がんの人です。がんは、病気の告知が自分の死を考える機会になり、人生会議に取り組みやすい側面があります。なぜ、人生会議が必要なのでしょうか。

例えば、夫が突然倒れて救急搬送されたり、認知症になって自宅で症状が悪化したりした時、妻や子どもたちに延命治療や入院などの判断が委ねられ、

どうすればいいか迷う」といった場面が増えていきます。日常の対話を通して、自分の人柄や大切にしていることが周囲に伝わっていれば、自分らしい最期につながるはずです。病气や治療などの暗い話ばかりではなくていいし、結論を急がなくてもいい。「人生会議」という言葉には元氣なうちに理解者を見つけておき、口から自分の気持ちを話そう、という意味が込められています。

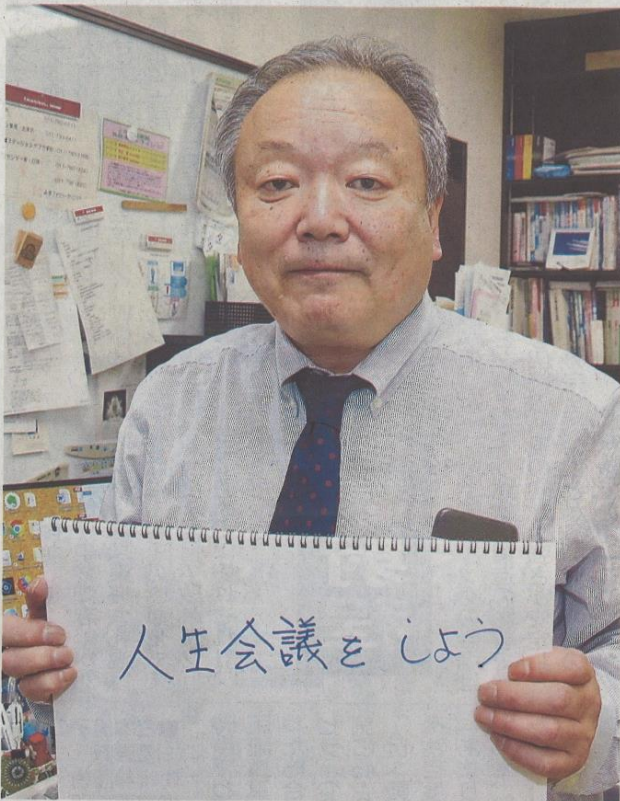
家族と「人生会議」

自分らしい最期へ対話を

**人生会議 厚生労働省が**  
昨年8～9月、「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)」の愛称を募り、有識者らでつくる選定委員会が、1073件の中から浜松市の看護師の案を選んだ。毎年11月30日(いい看取り・看取られ)を「人生会議の日」と定め、人生の最終段階の医療やケアについて考える日とした。厚生省のホームページに、「人生会議」や「ACP」の詳細、話し合いの進め方などが掲載されている。

あなたが、もし、病气やけがで回復が見込めなくなったら、人生の残りの日々をどう生きたいですか。年の初めにそんな難しい話題かもしれませんが、今年はずせ、親しい人と話してみたいと思います。

みきファミリークリニック院長 三木 敏嗣さん(55)



みき・としつぐ 十勝管内本別町出身。東邦大医学部卒。2008年にみきファミリークリニックを開業。札幌市東区地域ケア連絡協議会幹事。

今では当たり前になったが、告知ですが、ここまで浸透するのに20年から30年かかりました。私もかりつけ医の立場として、じっくり時間をかけて、人生会議の大切さを地域医療の現場で広めていきたいと思っています。

(阿部里子)